

北海道熊研究会」 Hokkaido Bear Research Association 創

刊 2013年1月25日

＜北海道熊研究会 会報＞ 第110号 2022年2月24日

北海道熊研究会事務局

北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致します

e-mail: [kadosaki@pop21.odn.ne.jp](mailto:kadosaki@pop21.odn.ne.jp)

既報会報の1～109号はWebsiteに「北海道野生動物研究所」と  
入力し、ご覧下さい

## 「北海道熊研究会」 Hokkaido Bear Research Association の

### 活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

今回は、「世界自然遺産地（知床）（2005年7月17日指定）で、そこを牛耳っている研究者（？）達が熊と鹿について、首に巾5cm程もある太いバンドを、付け、そのバンドの上下に、小形の弁当箱程も有るGPSと電波発信器を対に付けて、その状態で2年も3年も装着させ続けると言う正に虐待を行っている事について述べる。

その事実を、取材におとずれる新聞・テレビ関係者も、口止めされているのか、一切報道しない。

報道すると、その地域への再度の入域許可が得られない為である。

要するに、首にGPSと電波発信器を付けて居る連中は、知床で、熊鹿を虐待している事実を世間に知られたく無いのである。

### <動物調査の正道>

それは対象動物に人為的負担を与えないで調査を行う事である

いずれにしても、知床「世界自然遺産地で、行われている熊と鹿の調査手法は異常である

本号に掲載した写真は、門崎が稗田一俊氏と  
共同で、2013年～2018の6ヶ年間、知床半島  
の北部の、ルシャ川とテッパンベツ川両流域で、  
調査を行った際に、撮影したもので有る。

調査の基本は、検体に、負担や苦痛を与えないで、  
為す事である。自分や家族の首に、同じ装置を付けれるか？  
そして、幾年もその状態で、放置し得るか？

動物の生態調査の基本は対象個体に負担を課さない状態での実視観察が基本で、これに勝る方法は無い。人も熊(罠)も含めて、あらゆる動物に共通する事だが、動物の行動には必ず「目的と理由」があるから、調査の基本は行動を詳細に観察しながら、それを探る事である。それを繰り返すことで、その事象が、個体として、または種として、普遍的な事か稀な事かも分かって来るし、しいては、その個体の心も伝わって来る。さらに、目視観察や調査を続ける事で、他種生物との関係や地理的關係や気候との関係など、様々な事が分かって来るし、さらには、新たな調査課題にも気づく事がある。罠について、検証調査を繰り返していれば、「熊に襲われたら死んだ振りが有効」(間野勉氏)等の妄言

は発想しない。「熊研究者を自認する者は、熊に関するあらゆる事象について、検証調査を繰り返す事によって、その事象の真実を解明せよ」と、**私は言いたい。**



首の上下に GPS と電波発信機を付けられた熊 装置のバンドが首に食い込んでいる

## 「世界自然遺産地（知床で、殺されている熊の 数

2019年度（2019年4月1日～2020年3月31日）に、世界自然遺産地がある斜里町と羅臼町で、殺された熊の頭数を言うと。

斜里町管内で：駆除(害獣として)26頭。  
狩猟として1頭

羅臼町管内で：駆除(害獣として)13頭

多くの国民は世界自然遺産地の本拠地で、  
これほど多くの熊が毎年殺されているとは思ってはいないであろうし、「自然遺産地では、野生動物は保護されていると」、多くの国民は発想していると私は思うが、現実とは逆である。 私自身体験しているから言うのであるが、世界自然遺産地域には「特別地区」と言う地域があるが、そこには、熊や

鹿を殺している事に異を唱える研究者は、入城許可せず、熊鹿を虐待して居ることに口を閉ざし、虐待している彼らに阿沓<sup>アヲ</sup>ネ<sup>ネ</sup>る者のみを入れる、と言うのが実態である。



幼獣3頭連れの母熊　子1頭は右下の黒いの　6月撮影  
首の上下にGPSと電波発信機を装着され幼獣3頭連れの母熊：光線の関係で装置が見えない  
次頁の写真では、首下の装置だけ見える　右下の黒いのが、もう1頭の幼獣



首の上下に GPS と電波発信機を装着され幼獣 3 頭連れの母熊：首の下に装置が見える  
幼獣 1 頭は母の胸元に、他の 2 頭は母の右後方と右横前下に見える

今一度、発信器を着けられて、呼吸に息苦しさを感しながら、それを耐え忍んで生活して居る動物達の内心を思い遣ってみよと私は言いたい。



首の上下に GPS と電波発信機の装置が見える、雌鹿



## 「 熊の首に電波発信器を付ける調査の事初め

北海道で野生の熊に電波発信器を装着した第 1 号は、朝日新聞 1977 年 4 月 30 日の記事によると、北大の天塩地方演習林で冬眠中の明け 3 歳(満 2 歳 3 ヶ月令「門崎：注記」)の熊に、わが国で初めて無線発信機をつけたが、「麻酔薬で苦しんだとみえ、口を開き舌を咬み切って、死んでいたとある」。なんとむごい事をしたものか。この熊は少なくとも 4 ヶ月間に及ぶ絶食での「冬籠もり末期」の状態、体力も生理的な抵抗力も極度に低下していたであろう事は、脊椎動物の研究者であれば分かるはずで、それも吟味せず体力抵抗力も分からない状態で、麻酔する事は危険であることは、常識だが、それにも係わらず麻酔し苦悶死させた事は、倫理観の欠如以外の何ものでもない。こう言う連中の倫理観が、知床での野生動物を調査している者達に踏襲され、現在に至っていると私は見ている。

熊の首に電波発信器を着けの調査は、1977 年以來今に至るも 45 年も北海道で行われ続けているが、その結果から、何か人と熊の益となる事、例えば「人身事故の防止策や人と熊の軋轢を減じる策など」について、発信器装着調査を行っている者から、何か公表提起されているかと言え、そう言う事は何一つ公表されてい

ない。新聞等で公表された事と言え、**「思ったより、熊の行動域は広がった」とか、「どこそこまで熊が移動していた」とか「何時の時季はどこそこを多用していたとか」、**と言う事ぐらいである。この程度の知見は発信器に頼らずとも、現地で実視調査を為していれば分かる。

首の上下に GPS と電波発信機の装置が見える、雌鹿

